

科研費基盤研究(B)「モンゴルをとりまくエスノスケープとアイデンティティの重層的動態に関する実証的研究」第2回公開研究会

モンゴル・ヒップホップをめぐるエスノスケープの現在

日時：2018年11月18日(日)～19日(月)

会場：滋賀県立大学

プログラム：

11月18日(日)

13:30～15:10 ドキュメンタリー映画「モンゴリアン・プリング」上映(A7-101 教室)

15:45～16:15 モンゴルのラッパーによる研究公演(講演および実演)(交流センター・ホール)

出演者: QUIZA と Gennie

11月19日(月)

13:10～16:30 公開研究会(A1-301 教室)

司会: 滝澤克彦(長崎大学)

発表

島村一平(滋賀県立大学)

「シャーマニズムからヒップホップへーモンゴル口承文芸の原風景と新風景」

「国境を超えるヒップホップとモンゴルらしさ」

上村明(東京外国語大学)

「2重のブリコラージューモンゴル・ヒップホップの作られ方」

公開討論 パネリスト: QUIZA、Gennie、島村一平(滋賀県立大学)、上村明(東京外国語大学)

18:00～ 懇親会

① 研究会の全体趣旨

滝澤克彦

「モンゴル」という言葉は、いくつかのイメージを呼び起こさせる。なかでも、大草原のなかで移動生活を続ける遊牧民の姿はもともとポピュラーなものであると言えるだろう。実際に、遊牧という生活様式が歴史的に見てもきわめて長い時間をしめ、それゆえ彼らの文化や社会制度にあたえた影響は計り知れない。人々もそのような生活様式を彼らの「伝統」として自己認識してきた。そして、現在も「モンゴル帝国」と「遊牧」は、彼らの民族的アイデンティティの不可欠な要素となっている。

一方で20世紀に入ると、モンゴル系諸民族は国境により分断され、その大部分が社会主義国家に包含された。そこで、彼らは定住化や都市化といったそれまで経験したことがない社会的変化を経験してきた。さらに、1990年以降の急速なグローバル化は変化を加速させ、

人々の生活様式はもはやモンゴルの伝統的イメージの枠を大きく越えるものとなっている。「伝統的」な遊牧生活を送る人々はすでにマイノリティとなりつつあり、国外／国内移住者や国際結婚、新たな文化や宗教の受容などは、「本質的」なものとしてイメージされた民族の境界をますますぼやけさせるものとなっている。

つまり、いまモンゴル系の人々は、自らの文化や伝統を改めて見つめ直すべき状況に置かれている。そこで、彼らはどのように「モンゴル」を捉え直し、そこに自らを位置づけ、それを表現しようとしているのだろうか。特に、グローバル化の進展にともない外国宗教への改宗や国際／国内移動、国際結婚などによって境界的状况に置かれた人々は、これまで経験したことがないほどに「モンゴルとは何か」という課題を突きつけられている。そこには、外部から否応なく突きつけられる「モンゴル性」との葛藤も存在する。それに対して、彼らは、様々な形で新たな「モンゴル」イメージを生み出してきており、それは一つの「エスノスケープ」をなしつつある。

本研究会では、まさにこのようにして生み出された「モンゴル」の「エスノスケープ」が、グローバルに漂いながら、いかにしてローカルな人々の認識や行動を規定し、人と人をつなげ、あるいは対立を生み出していくのかを論じる。それによって、グローバル化が進む現代社会における民族的アイデンティティの重層的動態を浮かび上がらせたい。

② 第2回研究会の趣旨

島村一平

本研究会では、モンゴル帝国や遊牧といった「本質的」なモンゴル・イメージをぼやけさせるような新しい文化イメージを扱った科研基盤B「モンゴルをとりまくエスノスケープとアイデンティティの重層的動態に関する実証的研究」（代表：滝澤克彦・長崎大准教授）の第二回研究会である。今回の研究会では、現代モンゴルの若者文化のひとつであるヒップホップを取り上げ、一見すると伝統文化とはかけ離れてみえるヒップホップの文化の中にモンゴルのエスニックな景色、つまりエスノスケープを見出す試みである。この研究会では、モンゴルのヒップホップと都市化する現代モンゴルの社会問題を扱ったドキュメンタリー映画「モンゴリアン・ブリング」を上映するほか、映画に出演しているモンゴル人のラッパー2名（Quiza、Gennie）の2名を招聘し、研究公演（講演および実演）をしてもらう。また研究会では、この2名のミュージシャンを交えながら、討論会を行うものとする。